

初期真宗史料としての「御入滅日記事」

小 山 正 文

緒 言

三重県津市一身田町の真宗高田派本山専修寺に、延慶二年（一三〇九）の紀年をもつ同寺第三世顕智（一一二一—六—一三二〇）筆録の『抄出』『見聞』『聞書』という一連の聖教が伝蔵されている。

周知のように顕智は、親鸞（一一七三—一二六二）第一の高弟真仏（一二〇九—一五八）の弟子であるが、親鸞面授の門侶でもあつたところから二師没後の極初期真宗における重鎮として、高田門徒の育成発展に努めると共に京都東山の親鸞廟堂造営にも尽力した人物として著名である。右に掲げた三つの聖教は、その顕智が文字通り見聞きした経・律・論・釈・聖教・法語などの諸文を抄記したもので、それらの中には師の親鸞も用いなかった経典、論釈類もあり、また現在では出典未詳の文もすくなくからずみられて、親鸞直門侶たちの勉強の一端を垣間みることができるといふことに貴重な史料となっている。

古来専修寺では、この聖教の『聞書』に「延慶第二己酉初秋上旬第六書写之畢」、『抄出』に「延慶二己酉七月七日之書写之」、「見聞」に「顯智上人浄土ノ文類ヲアツメテ 八十四歳御年 専空十九歳ヲ給ハル 延慶二歳己酉七月八日」の三日連続にわたる書写授与年月日がみられるところより、顯智の没するちようど一年前にこれらの聖教を専空（一二九二—一三四三）が相伝し、同寺第四世になったことを示す証として大切に護持してきたものという。したがって部外者には永らくその実体がわからなかつたのであるが、生桑完明氏が昭和十一年（一九三三）の『高田学報』第十一〜十二輯に『抄出』を、同じく昭和三十二〜三十四年（一九五七〜九）の『高田学報』第四十一〜四十六輯に『聞書』をそれぞれ復刻紹介され、ようやくその内容が把握できるようになったのであった。しかし『抄出』の二冊目が『聞書』と一緒になっているとされる様相や、『聞書』の中にみられる異筆の部分、そしてなによりも『見聞』の全文が、われわれにはうかがいしれないという隔靴搔痒の感を禁じえなかつたのである。しかるに平成十三年（二〇〇一）五月真宗高田派宗務院より『影印高田古典』第三卷顯智上人集（中）が発刊され、これに待望の『抄出』『見聞』『聞書』の全文がはじめて写真版で公開されるに至つたのはまことによろこばしい。

いまその『影印高田古典』の解説にしたがえば、『抄出』第一冊には經典類五種六十一文、聖教類六種七文。第二冊には經典類三種十四文、聖教類十種（実九種）十七文（実十九文）。『聞書』には經典類三十一種八十文、聖教類十七種四十二文、その他法語類など三十二種三十二文が収められているとある。『見聞』は掲載の順序や文の有無に若干の異同がみとめられるものの、その内容はほとんど『聞書』に同じで、『聞書』は『見聞』を整理整齊

清書した感が深いも、編纂過程においては『見聞』から『聞書』への一方向ではなく双方向という複雑な成立情況もみられるという。なお『見聞』には願智以外の専空や慶空とみられる筆蹟も多数まじっており、『聞書』にない文も十五文ほど検出されているので、結局『抄出』『見聞』『聞書』に収録された諸文は、総計四百二十文以上にも達する勘定となり、もつて願智がいかに博覧、博識、博学な真宗門侶であつたかがわかり注目しなければならぬ。そのことは右の三部作だけではなく専修寺に伝存する正応三年（一二九〇）の『浄土和讃』『正像末法和讃』『永仁元年（一二九三）の『愚禿鈔』、同四年（一二九六）の『法然上人伝法絵』、正安四年（一三〇二）の『選択本願念仏集』、乾元二年（一三〇三）の建長八年（一二五六）覚信苑親鸞消息、嘉元三年（一三〇五）の建長八年慈信苑親鸞消息、徳治二年（一三〇七）の『一念多念文意』、同三年の『西方指南抄』下末、同年の『五卷書』と呼ばれる親鸞消息、その他年時不詳の『西方発心集』、『大阿弥陀経』、『大名目』、『皇太子聖徳奉讃』、『唯信鈔』、『唯信鈔文意』、十月廿一日付浄信坊宛親鸞消息、正嘉二年（一二五八）の親鸞法語等々多数の願智写伝本からも十分推し測ることができ、願智が諸国を遊行する単なる念仏勧進聖でなかつた事実におもいをいたすべきであろう。

願智の「御入滅日記事」

親鸞直門侶の願智が筆録した上記の『抄出』『見聞』『聞書』という三部作のうち『見聞』に「御入滅之日記事」、

『聞書』に「御入滅日記事」と題される後掲史料④・⑤がそれぞれ収載されている。この④・⑤は題名や親鸞の尊称に若干の違いが認められるが、登場人物、人数、順序、月日、年齢、馬鳴以下を別立とすることなど、両史料はまったく同一内容物である。この場合すてみたごとく『見聞』に延慶二年（一三〇九）七月八日、『聞書』に同六日の年月日が記されているところより、④・⑤両史料とも顕智の筆ながら、『聞書』の「御入滅日記事」が前、『見聞』の「御入滅之日記事」が後の書写ということになるが、しかし事実上は反対のようである。その理由を二、三あげるならば、まず題名が『見聞』の「御入滅之日記事」では「ノ」が重複してしまつたために、『聞書』は「御入滅日記事」と改めていること。第二に『見聞』における曇鸞と羅什の順序が、指示通り『聞書』では入れ替えられていること。第三に『見聞』の親鸞に対する尊称が、その弟子の真仏と同じ「法師」では差違を認めがたいので、『聞書』においては「上人」とかえていること。第四に『見聞』と『聞書』の筆致を比較した場合、従来からいわれているように『聞書』は明らかに『見聞』を整理清書したものであることがわかるから、結局『見聞』所収の④史料「御入滅之日記事」が前で、『聞書』所載の⑤史料「御入滅日記事」を後とみるのが妥当ということになる。したがって『聞書』『抄出』『見聞』の連続日付は書写年月日を意味するのではなく、顕智より専空へこれらが順に付属された日を示しているとうけとるのがよいのではないかと考える。

ところで、④・⑤は一見してわかるごとく最初に釈迦の没年月日を書き、以下真仏まで計二十一人の入滅月日と全部ではないが没齡を記し、ついで項を改め馬鳴など五人の同じような事項をあらわしたものとなっているが、ここにあげられた総計二十六人の人たちは、いったいなにを基準に選定されているのかといえ、それはほかで

もなく三国すなわち天竺印度、晨旦中国、和朝日本の三朝浄土大師たちであるということに尽きよう。以下そのへんのところを順次検討していきたい。

まず釈迦（釈迦の生没年には諸説あるが、中国や日本仏教界では古来周昭王二十六年甲寅四月八日誕生、同穆王五十五年壬申二月十五日涅槃を信じてきた。すなわち紀元前一〇二七―九四九ということになるが、歴史上の実際の釈迦は、紀元前四六三―三八三とみるのが有力なようである）は、いうまでもなく浄土教の大恩教主でもあるから、最初に位置するのは当然である。続く竜樹（二―三世紀頃）、天親（四―五世紀頃）は、そのあとで出てくる中国の曇鸞（四七六―五四二）、道綽（五六―二六四五）、善導（六一三―六八二）、そして日本の源信（九四二―一〇一七）、源空（一一三三―一二二二）と共に親鸞が『教行信証』、『浄土高僧和讃』、『浄土文類聚鈔』などで選定している真宗七祖であることは、あらためて述べるまでもなからう。いっぽう天親の『浄土論』を訳出し、曇鸞に『仏説観無量寿経』を授けた菩提流支（六世紀頃）は、中国浄土教の祖師的存在として著名で、これに続く曇鸞、道綽、善導、懐感（七世紀頃）、小康（生年不詳―一八〇五）を浄土五祖としたのは、『選択本願念仏集』の著者法然房源空であった。他方羅什（三四四―四一三）は『仏説阿弥陀経』の名訳者として有名であるだけではなく、竜樹の『大智度論』『十住毘婆沙論』の訳者でもあったから、浄土教史上逸することのできない人物といえよう。聖徳太子（五七四―六二二）は親鸞を浄土門へと導いた和国の教主であり、恵慈（生年不詳―六二二）は朝鮮半島の高麗より来朝した太子の師として、太子信仰の興隆発展と共になじみ深い人となっている。空也（九〇三―九七二）と永観（一〇三二―一一一一）は、源信とならんで平安浄土教興隆の担手であった。信空

(一一四六一—一二三八)、隆寛(一一四八一—一二二七)、聖覚(一一六七—一二三五)、そして親鸞はいうまでもなくこれみな比叡山出身の源空門下の逸材であり、また顕智など東国の真宗門徒にとつては、時代も近い親近感のある人たちがかりである。最後の真仏はじめにも記した通り親鸞第一の高弟であると同時に、この「御入滅日記事」の記者顕智の師匠にほかならない。

以上のように釈迦より真仏までの二十一人は、三国浄土教と大変関係深い人物であることが了解できたかとおもう。それではこの人びとに続いて、別に示される馬鳴以下の五人の場合はいかがであらうか。一見したところ浄土教、なかんづく真宗とのかかわりが希薄なようにもおもえるので、調べてみる必要がある。

まず馬鳴(二世紀頃)であるが、彼は『大乘起信論』の著者とされる印度人で、竜樹(竜猛)や天親(世親)と共に中国日本仏教界に大きな影響を与えた菩薩的存在として知られる人である。実は馬鳴の『大乘起信論』は、親鸞も『教行信証』に引くところであるから、真宗と全く無縁の人物ともいえない面があるといえよう。次の伝教(最澄七六七—八二二)はあらためて記すまでもなく天台宗比叡山延暦寺の開祖である。親鸞はその山で二十年間を過ごしたことはあまりにも有名であり、後年『教行信証』に最澄作とされる『末法燈明記』を長文にわたって引用するほか、『浄土和讃』所収の「現世利益和讃」第二首にも「山家ノ伝教大師ハ 国土人民ヲアワレミテ七難消滅ノ誦文ニハ 南无阿弥陀仏トトナエシム」(専修寺藏国宝本による。カッコ内は文明版)と讃詠している事実もあるので、伝教がここに登場の理由もある程度理解できよう。ところが三人目の弘法(空海七七四—八六四)以下は、親鸞や真宗との接点をやや見出しにくい感がある。弘法の場合強いていえば、親鸞が晩年になした

『皇太子聖徳奉讃』や『上宮太子御記』に載せるいわゆる「廟峴偈」は、弘仁元年（八一〇）空海記とある偽撰書の『上宮太子廟參拜記文』が、実はもとになって大いに流布したと関係しているのかもしれない。右の空海偽撰書は諸書に引用されるが、そのひとつに『弥陀観音勢至等文』というのがあり、これは『念仏往生文』『真宗肝要義』『臨終正念往生要』『如来意密証得往生要義』と共に五卷セットとなっていて、京都誓願寺にはその鎌倉後期の古写本五巻を蔵するが、真宗高田派古刹の愛知妙源寺、同満性寺、福井法雲寺（現在は大谷派で右の五巻は今亡）等々にその室町時代の写本を伝えており、高田門流では弘法の名はなじみ深かったのである。弘法について四人目にあげられているのは慈覚（円仁七九四―八六四）である。慈覚といえは誰しも思い浮かべるのが比叡山常行堂のいわゆる「山の念仏」であろう。これは慈覚が中国浄土教家のひとりで、小康と共に「後善導」とうたわれた法照（八世紀中頃）流の音曲による念仏を唐より將來したものを指すが、在叡時代の親鸞はその常行堂の堂僧を勤めていたことはよく知られており、また親鸞には専修寺蔵の『見聞集』に法照の『浄土五会念仏略法事儀讃』を抄写していることも見逃してはならない事実といえよう。そして法然房源空の遺文集である『西方指南抄』六冊を康元元年（一二五六）十月より翌二年正月にかけて親鸞が書写するなかで、第四冊目に「源空聖人私日記」を収録するが、それに「臨終已到 慈覚大師之九条袈裟懸之 向西方唱云 一一光明徧照十方世界念仏衆生撰取不捨云 停午之正中也」とあるごとく源空は臨終の際慈覚大師の九条袈裟をかけて浄土に還歸したことを親鸞も知っていたから、「御入滅日記事」に慈覚が出ていても不思議でないといえよう。慈覚についてはそうしたことも共に注意を喚起しておかなければならないのは、かれが下野国の出身者ということである。関東

以北にはこれがため慈覚開創開山開基伝承をもつ寺院がすこぶる多く、慈覚は貴人信仰の対象者であった。顕智の高田門徒は、その慈覚信仰の中心ともいえるべき同じ下野国にその本拠地を置いていたから、ここに慈覚が登場してもなんら異とするにたりなかつたわけである。伝教・弘法・慈覚の三大師に対し、浄土教や真宗とどうしても結びつき難いのが最後の行基（六六八―七四九）である。もつとも行基信仰は、聖徳太子・弘法大師信仰と共にその広がりや全国的であるから、ラストにこれを付記したのではないかということも考えられよう。しかしやはりここでも親鸞や真宗とのつながりがないものかと史料にあたっていたら、行基の説話が平安初期の薬師寺僧景戒著『日本靈異記』に七話、永観二年（九八四）源為憲（生年不詳―一〇一一）撰の『三宝絵』に五話が出ていることに注目された。実は親鸞はこの二書を見ていることが、康元二年（一二五七）の『大日本国粟散王聖徳太子奉讃』、正嘉元年（一二五七）の『上宮太子御記』の奥書や本文よりわかっている。これらの太子和讃や太子伝記を作る際、参考にした二書を通し行基の説話も読んだであろうことがおもい合わせられたことである。なお親鸞七十六歳の宝治二年（一二四八）は行基五百回忌、顕智七十三歳の永仁六年（一二九八）は同五百五十回忌に相当し、行基信仰が盛り上がりをもせた時期とも重なっている点にも留意しておきたいとおもう。

かくて顕智の『見聞』『聞書』に掲載される①・②両史料の別に扱われている五人も、はじめの二十一人とはやや距離を置く存在であったとはいえず、東国の初期真宗門徒にとっては、かれらもまったく違和感なく浄土教や真宗との関わりにおいて崇敬されていたことは、まことに興味深いものがあるといえよう。

「御入滅日記事」と初期真宗

さて、上にみた『見聞』『聞書』所収の「御入滅日記事」をあらため通覧し、これの作者や成立の時期、あるいはこの史料そのものからいったい何を読み取ることができるとかといった諸点につき考察してみたい。

まず作者と成立年代についてであるが、しばしば記すごとく④・⑤両史料を収める『見聞』と『聞書』は、『抄出』と共に三部作をなす親鸞直門侶顕智の筆であり、かつこの三書には延慶二年（一三〇九）七月の紀年もみえるので、作者と成立時期には何の問題点も存しないといわなければならない。しかし三部作は文字通り顕智が見たり聞いたりしたことを抄写した内容であるから、「御入滅日記事」だけを顕智の作とするのはいかなものかとおもわれるし、また紀年はすでに触れた通り専空への授与年月日を示すとみられるので、これまた絶対的ではない。

これに関しおもし合せられることは、親鸞には釈迦、曇鸞、道綽、聖徳太子、法然房源空、聖覚たちの入滅年月日を記録したものが^③あり、また真仏にも源信のそれを記した『尊号真像銘』、光明本尊が愛知妙源寺に蔵せられているほか、親鸞の入滅年月日や時刻については、やはり真仏の弟子で親鸞直門侶でもあつた専信坊専海が安城御影に録するなど、^⑤顕智の周辺にはこうした既存の入滅記があつて、それを写したとみたほうが実情に即しているのではないかと考える。もともと親鸞や真仏については、顕智自身が二人の臨終に侍り葬送の儀も執り行った可能性が高いから、そうしたところは当然顕智の記入になるものとみてなんらさしつかえないも、その他の大部

分はやはり文字通り顕智の見聞にもとずきなされたのではないかとおもわれる。よつて本史料の成立時期は、親鸞が没した弘長二年十一月二十八日以降、『聞書』が専空へ授与される延慶二年七月六日以前と限定できるが、『見聞』『聞書』とも「御入滅日記事」の直前に「一 一見之輩 共期 仏一果 聖徳太子天王寺瓦銘文也 文永六年己此文ハ顯給ヘリ天王寺坐ス」なる四天王寺の文永六年（一二六九）瓦銘文のことが出ているので、結局それより延慶二年（一二〇九）までの四十年間に絞り込むことが可能であろう。

ところで、④・⑤両史料に登場する総計二十六人の祥月と命日をここであらため調べなおしてみたら、つぎのような結果になった。

「御入滅日記事」の祥月命日

一月	源空上人	慈覚大師
二月	釈迦如来	聖徳太子 行基菩薩
三月	天親菩薩	善導和尚 聖覚法印 真仏法師 馬鳴菩薩 弘法大師
四月	道綽禪師	
五月	なし	
六月	恵慈禪師	源信和尚 隆寛律師 伝教大師
七月	曇鸞法師	

八月 羅什三藏 懷感禪師

九月 空也聖人 信空法師

十月 竜樹菩薩 小康

十一月 菩提流支 永觀律師 親鸞上人

十二月 なし

「御入滅日記事」の毎月命日

二日 永觀律師 行基菩薩

三日 天親菩薩 小康 馬鳴菩薩

四日 菩提流支

五日 聖覚法印

七日 曇鸞法師

八日 真仏法師

九日 信空法師

十日 源信和尚

十一日 空也聖人

真宗史料としての「御入滅日記事」

十四日 善導和尚 伝教大師 慈覚大師

十五日 釈迦如来

十六日 隆寛律師

十八日 竜樹菩薩

二十日 羅什三蔵

二十一日 弘法大師

二十二日 聖徳太子 恵慈禪師

二十五日 源空上人

二十七日 道綽禪師 (善導和尚)

二十八日 親鸞上人

三十日 懐感禪師

すなわち祥月命日のない月は五月と十二月のみであり、毎月の命日は隔日の割合、つまり二十日間にも及んで
いるのがわかる。

親鸞の消息によれば、「聖人ノ廿五日ノ御念仏」(年月日不詳性信宛)、「念仏ノススメモノ」(十二月廿六日付教
忍宛)、「御ココロサシノ銭」(十一月九日付慈信宛)といった文言が散見されるが、これは親鸞在世中から法然房

源空の毎月命日が勤められ、念仏勸進による志の銭が寄せられて親鸞のもとへ届けられていたことを物語っている。こうしたことは親鸞没後の顕智が率いる高田門徒をはじめ各地諸門徒の道場においても、「御入滅日記事」に出てくるような浄土先徳たちの命日を頻繁に勤めては念仏を勸進し、浄財を集めていた事態を想定させるに十分なものがあるろう。やがてそうした三朝の浄土大師たちを視覚的にあらわし道場の本尊とするようになったのが光明本であり、羅什、浄土五祖、聖徳太子、法然、親鸞などの絵巻、絵伝であり、太子、法然、親鸞、真仏、顕智たちの彫画像ではなかったかとみたいのである。「御入滅日記事」の背景にかかる事象を読み取ることができるとするならば、これは極初期の重要な真宗史料のひとつとして、今後もっと注目していく必要があるのではないかと考える。

蓮如の「御入滅日記」とその背景

京都西本願寺に『諸要文集 愚要記』と題される蓮如（一四一五—一四九九）自筆の聖教が蔵されている。これは表題右下の記からもわかる通り、蓮如が自用のために諸要文を記し留めておきたいわばノートであるが、実はこれに顕智の①・②とほぼ同内容の「御入滅日記」③が収められていて興味そそられる。なにしろ顕智の①・②を収載する『見聞』『聞書』は『抄出』と共に法義相伝にかかわる専修寺秘蔵の大切な法宝物物なのであるから、まさかそれを本願寺の蓮如が見写していたなどは、誰しも想像もできず驚かされるに違いないからう。よって以下蓮

如がそれを写しえた理由やその目的などについて考察の筆を進めていきたいとおもう。

さて、蓮如が写す「御入滅日記」であるが、これを願智の「御入滅日記事」と逐一比較してみたところ、かなり相違点のあることがわかる。その一はまず題が違ふことで、願智の④は「御入滅之日記事」、⑤は「御入滅日記事」とあるのに対し、蓮如の③は単に「御入滅日記」とだけ記されている。この場合⑥が正題とおもわれることはすでに触れた。その二は④・⑤の二段書きが、③では一段書きとなっていて見やすいこと。その三は④・⑤の第二グループに属する「馬鳴菩薩」以下の五人が、③では第一グループへ移され、かつ年代順に並べかえられていること。その四は「曇鸞法師」が「曇鸞和尚」、「懷感禪師八月三十日」が「懷感禪師 八月十三日」、「小康」が「小康法師」、「恵慈禪師六月廿三日」が「慈恵法師六月廿日」が「伝教大師六月十四日」が「伝教大師 六月四日」、「空也聖人」が「空也上人」など、③では尊称や入滅日に若干の違いが見られること。その五は蓮如のケアレス・ミスであろうが、④・⑤にある「聖覚法印」が③では脱落していること。その六はもっとも大きな相違点で、④・⑤にみない「願智法師・慶円法師・信性法師」の三人が③では増加していること。その七は④・⑤が総計二十六人であったのが、③は聖覚を欠いて三人増となっているため総計二十八人であること等々の違いである。しかし基本的に④・⑤・⑥は同一内容で、蓮如の③は敬称面よりみて、おそらく『見聞』の④ではなく『聞書』の⑤をもとに順序や尊称を変更し、さらに三人を付加して写したものとみてよいであろう。

それではいつたい蓮如は、「御入滅日記事」を所載する専修寺の『聞書』をどのようにして見写することができたのであろうか。これについては専修寺山門前の玉保院開基尊乗坊恵珍（一四六九—一五五四）が、天文十七年

(二五四八)と同二十二年(二五五三)に口述した『代々上人聞書』(『高田ノ上人代々ノ聞書』とも)の次の記事が有力な示唆を与えよう。⁽⁶⁾

本願寺大谷ニ在シ時 真恵上人ト蓮如上人ト等閑ナシ 真恵御在京ノ時ハ 大谷ヨリ請待ニテ入御マシマス事
数月也 此時マテハ本願寺一向不屑ノ躰也 其時 御本尊ノ仏餉ヲハ衆僧へ請取テ食之 開山ノ仏餉ヲハ下
妻へ請取テ食之 二ツ氏ニ下妻納所トシテ取サハキ也 此時本願寺不肖ナレハ 毎日京へ出テ、米七升ツ、買
取 朝夕ノ食ニト、ノへ申スト 下妻丹後真恵上人へ御物語申上ルト也

又此時 真恵上人ト蓮如ト堅約ヲ定玉テ曰 高田本願寺両家ノ門徒ヲ互ニ不_レ可_レ取ト云々
すなわちこれによれば大谷本願寺の蓮如と高田専修寺の真恵(一四三四—一五二二)とは、とりわけ懇意で親
しい間柄にあり、おたがい門徒の取り合いをしないと堅く約束していたことがわかる。事実若きころの二人に親
交があつたことは、専修寺所藏の大工に関する真恵の問いに答えた蓮如自筆書状五通の存在からも十分窺知でき
るところである。かかる二人の隔意なき親密な関係が、真恵をして蓮如に「御入滅日記」の見写を許したのであ
ろうことは想像に難くあるまい。そのとき真恵の指示があつたのか、それとも蓮如の意向によるのかは定かでないが、ともかく蓮如の◎は顕智の④・⑤と記載順序が変更されているだけではなく、新たに顕智・慶円・信性の
三人が加わつたものとなつている点は、大いに注目しなければならぬ。

ところで、④・⑤の筆録者顕智は、一説に真仏の女婿ともいわれ、親鸞に先立って亡くなつた真仏の高田門徒
を名実ともに初期真宗最大の教団にまで育成する一方、京都東山の親鸞廟堂の創立、ならびにいわゆる唯善事件

による同廟荒廃後の復興に尽力した人物としても知られ、かれの名は鎌倉時代の本願寺・専修寺文書を始め、覚如（一二七〇—一三五二）の長男存覚（一二九〇—一三七三）の『常樂台主老納一期記』、同次男從覚（一二九五—一三六〇）が記した覚如の絵巻『慕帰絵』など、初期本願寺史料にもしばしば登場することは、すでに周知のところであろう。したがって蓮如の「御入滅日記」に真仏の後へ顕智が入っているのもなんら異とするに足りず、多分それは真恵の助言によるものかとおもわれる。これに關し蓮如の顕智についての次のような語りは、「御入滅日記」を写させてもらった際、真恵より聞いた話が素材となっている可能性が高いかもしれない。

『第八祖御物語空善聞書』（『空善記』）

一 ノタマハク 開山聖人ノ仰ニ 舟ニヨヒマシマス事アリ ソノ時 カチ地ノアルトコロヘハ 舟ニハノルマシキコト也ト 又クサヒラニスコシヨイタマフコトアリ ソノ時モクサヒラハクウマシキモノ也 ト仰候キ
ソノ時ヨリ高田ノ顕智ハ一期フネニノラス クサヒラクハストイフナリ サレハ暫時ニ仰ノ候ヒシヲモ信シテ候キ イマワカ御身ハ真実ニオモヒイレテ ヲシフルコトナマキ、ニシ 信セストテ 御述懐ニテ御座候キ

（『真宗史料集成』第二卷 蓮如とその教団 四二—四五頁）

『蓮如上人一語記』（『実悟旧記』）

一 開山聖人ノ御代 高田ノ顕智上洛ノトキ 申サレ候 今度ハ既ニ御目ニカ、ルマシキト存候処ニ 不思議ニ

御目ニカゝリ候ト申サレ候　ソレハイカント仰ラレ候　船路ニ難風ニアイ迷惑^{ツラ}仕リ候シ由申サレ候ヘハ　聖人仰ラレ候　ソレナラハ船ニハノラルマシキモノヲト仰ラレ候　其御詞ノ末ヘニテ候トテ　一期船ニノラレス候又茸一醉申サレ　御目ニ遅クカゝラレ候時モ　如此仰ラレシトテ一期受用ナク候シト^{云々}　カヤウニ仰ヲ信シチカヒ申マシク存ラレ候事　誠ニ有難殊勝ノ覺悟トノ義候

〔真宗史料集成〕第二卷　蓮如とその教団　四六六頁

さて、蓮如の◎には何度も記す通り、顕智に続いて慶円、信性が登場するが、この二人はいつたいどのような素性の持主なのであろうか。検討を加えよう。「御入滅日記」の順位からすれば親鸞―真仏―顕智―慶円―信性となるから、慶円は親鸞の曾孫弟、信性は玄孫弟とみれなくはないが、南北朝時代の康永三年（一三四四）や貞和三年（一三四七）の紀年をもつ愛知妙源寺藏本『親鸞上人門弟等交名』や京都光蘭院藏本『親鸞聖人物御門弟交名』では、そうした系譜は出てこない。しかるに蓮如が亡くなった同じ年の明応八年に生まれた孫の顕誓（一四九九―一五七〇）が著す『復古裏』（『復古裏書』とも）には、つぎのような注目すべき記事がみえていて、「御入滅日記」の親鸞から信性に至る系譜を裏付ける史料として注目される。

又越前国藤嶋超勝寺ノ初ハ　先此国二和田ノ信性ト云人有　是ハ参川国野寺本證寺ノ末学也　先祖慶円ハ高田顕智聖ノ弟子也　彼顕智ハ法義ニヲキテ信順フカク　本寺崇敬ノヲモヒナラサリナラス　モトハ常陸国真壁ノ真仏聖ノ所属　鸞聖人ノ孫弟也　同国和田ノ円善ハ是モ真仏聖ノ弟子ニ遠江国鶴見専信房専海ト申セシ人ノ門

徒也 何モ開山聖人御在世ニ逢奉シ御門人也キ 彼円善ノ弟子越前国大町ノ如道ト云者アリ 田嶋ノ興宗寺行
如和田ノ信性アヒトモニ覚如上人御在国ノ中 御勸化ヲウケラレシ法徒也

すなわちこれによれば慶円はまさしく顕智の弟子で、続く信性はその慶円を開基とする三河野寺本證寺の末学にて、越前国和田の人だったというのである。この『反古裏』の慶円と「御入滅日記」の慶円が同一人物であることは、いまも愛知県安城市野寺町の本證寺で伝統的に行われている村落年中行事の「おきょうえんさん」が、本證寺開基慶円の祥月命日である旧暦正月十三日と定まるところからも疑いないが、慶円を顕智の弟子とするのはいかがかとおもう。慶円の名は上掲の『交名』にも実は見出されるのであるけれども、妙源寺本の部分では残念ながら後世の改竄を受けているため、いまは光園院本によるならば親鸞―真仏―專信―円善―慶円となり、同じ真仏の流れをくむとはいえ顕智の門弟ではなかったことがわかる。円善や慶円など三河の初期真宗高田門流の淵源を顕智に置くようになるのは、貞治三年（一三六四）の『三河念仏相承日記』⁹からで、それまでの史料はたとえば存覚の『袖日記』にもみえる延文六年（一二三六）の「兩朝高祖尊像」¹⁰などみな光園院本『交名』と同様、顕智ではなく專信をもって三河門徒の鼻祖とみなしている。『三河念仏相承日記』において專信を顕智に置き換えた理由は、すでに指摘されているごとく覚如・存覚父子の来錫による三河門徒の高田離れを、高田門徒の大立物顕智の名を出すことによって、食い止めんとしたきわめて意図的なものであったということができよう。

なにはともあれ蓮如の「御入滅日記」の顕智に続いて登場する慶円は、『反古裏』に照し三河野寺本證寺開基慶

円と考定して誤りはない。寺伝に慶円の没年は文永九年（一二二二）、没齡は九十歳というが、これは慶円を親鸞直弟のひとりとみたい寺院由緒縁起にもとずくところで、実際の慶円の没齡は「御入滅日記」の七十歳をこそ信すべきであろう。残念ながらここでは没年の記載をみないのであるけれども、平成八年（一九九六）に実施された本證寺所蔵の木造慶円上人坐像（像高八十六・九センチ。平成十三年愛知県指定文化財）の解体修理で、貞和三年（一三四七）の墨書銘が発見され、その造像技法ならびに写実性から慶円没直後につくられたことが判明した^①。よって慶円は弘安元年（一二七八）の生まれで、貞和三年七十歳にて没したとみてよかろう。

最後に「御入滅日記」末尾に記される信性のことであるが、すでに『反古裏』でみたごとく信性は本證寺慶円の末学で、越前にくだり和田本覺寺を開く人物である。しかし、信性没後の跡目争いから藤島超勝寺が分立し、やがてこの超勝寺は北陸の有力一家衆寺院となって、一向一揆、永正一揆、享祿の錯乱で中心的役割を果している^②が、このような本覺寺・超勝寺の基を築いた信性と本證寺の慶円との関係を示す大変興味深い聖徳太子像の存在が近年明らかとなり^③、いよいよもって『反古裏』の内容が荒唐無稽な記述でないことがわかってきた。それは本證寺所蔵の木造聖徳太子立像と福井県永平寺町の信性を開基とする本覺寺蔵聖徳太子立像とが、像高、像容、材質、構造に至るまで鎌倉時代の瓜二つの双子像で、二像は同じ仏師の手になる太子像と判明したのである。慶円に太子信仰の存した事実は、本證寺蔵の重文善光寺如来・聖徳太子絵伝十四幅の存在からも十分しられ、右の本證寺旧太子堂本尊の太子像もそれを明確に示す遺物の一つにほかならない。信性が慶円のもとを辞し越前へ下る際、同一仏師の太子像を奉持したことはありうることだし、そのとき信性はおなじ仏師の作になる南無仏太子

像も携行したらしく、げんにそれも本覚寺に伝わる。しかし本覚寺の太子像に関しては、福井県勝山市平泉寺の白山神社が所蔵する聖徳太子絵伝の裏貼書に、この太子絵伝は太子像と共に楠正行（生年不詳―一三四八）が父正成（生年不詳―一三三六）菩提ために平泉寺へ納めたものであったが、その後の一向一揆で平泉寺が破却炎上した際、辛じて火災からまぬがれた絵伝であるといひ、太子像はいま本覚寺に安置されている旨のことを記す。

平泉寺が越前一向一揆に襲われるのは天正二年（一五七四）のことであり、絵伝の裏貼書は慶長七年（一六〇二）の記録であるから信頼できそうにおもわれるし、本覚寺側も同寺の太子像は平泉寺伝来品であり、南無仏太子像はその胎内納入像であったと伝えるので、本證寺慶円―本覚寺信性とはまったく無関係な太子像と考えられなくもない。しかし平泉寺現蔵の太子絵伝は、元来真宗系のものであるし、平泉寺の火中から太子像を救い出したのは本覚寺門徒であったと伝承することなどを考慮するならば、太子像も太子絵伝もとは本覚寺の伝来品であったものが、同寺の相統争いの際寺外へ流出し、当時強大な勢力を誇った平泉寺へ入ったのではないか。それを本覚寺が一揆を機に取り戻したというのが、存外ことの真相であったのかもしれない。

それはともかくとして、蓮如の「御入滅日記」に右に見た顕智・慶円・信性の三人が付加された背景を専修寺の真恵側と本願寺の蓮如側の両面からながめ本稿の結びとしたい。

蓮如の◎が顕智のⒶ・Ⓑと順序が異なり、二段書きを一段書きとしている点については、すでに触れたごとく見易さを主眼としたものであるうから蓮如・真恵二人の意向が反映しているとみてもよからうが、問題は顕智以下の三人である。これに関しては前に引用した『代々上人聞書』の続き文が、ことのほか真恵には強く意識され

ていたのではないかとみたい。

其後 参河国ニ和田野寺ノテラトテ両寺アリ 久シキ高田ノ末寺ナリ 和田寺ニ住持ナキ事久シ、真恵ノ御意ヲ得テ 本願寺ノ庶子ヲ住持セシム 元來本願寺ノユカリナル故ニ 終ニ本願寺へ皈入セリ 野寺ヲモ蓮如取レリ 時ニ日来ノ堅約破タリトテ 真恵上人ト蓮如ト御義絶ナリ 其後 加賀国ヲモ蓮如コレヲ取ル 又 三河国明眼寺ノ辰巳ニ当テ 池ヲ隔テ上宮寺ト云寺アリ 本ハ明眼寺ノ下ナリ 是モ蓮如取リテ山科ヨリカヨヒテ住セラルトナシ

これによつて明らかな通り蓮如は、元來高田門徒であつた三河国の和田寺（勝鬘寺）、野寺（本證寺）、上宮寺のいわゆる三河三箇寺をはじめとして、加賀国の門徒まで本願寺傘下に取り入れ、ついに従來からの互いに門徒の取り合いをしないという堅い約束が破れて、ここに真恵と蓮如の絶交が決定的となつたのである。それはおそらく蓮如が上宮寺へ十字の方便方身尊号を下付した寛正二年（一四六一）から同六年（一四六五）の延暦寺による無碍光宗本願寺破却で、高田専修寺門徒は同宗でないことを主張した時分のころとおもわれる。したがつて「御入滅日記」の書写は寛正初年あたりのことであつたかもしれないが、そのときすでに蓮如は三河三箇寺中勝鬘寺と上宮寺の本願寺門徒化に成功しつつあり、残る本證寺も時間の問題であつたから、危機感を覚えた真恵はあえて本證寺開基慶田の名を示し、その師専修寺の顯智と弟子本覺寺・超勝寺祖信性をあげて、蓮如を暗に牽制したともうけとることができよう。しかし「蓮如上人ツネく仰ラレ候 三人マツ法義ニナシタキモノカアルト仰ラレ候ソノ三人トハ坊主ト年老トシヨリと長ト此三人サへ 在所々々ニシテ仏法ニ本付キ候ハ、余ノスエくノ人ハミナ法義

ニナリ 仏法繁昌テアラウスルヨト仰ラレ候」(『栄玄聞書』六) とあるように蓮如は、諸国の大坊主寺院をはじめ年老、長といわれる地元の有力者たちを次つぎ席卷し、ついに日本仏教史上空前の本願寺大教団を構築したのであった。

ちなみに信性の本覚寺より分立した大坊主一家衆寺院の福井(西)超勝寺には、享徳四年(一四五五)蓮如の筆になる「開山已来代々」というつぎのような入滅往生記が存する。これなども「御入滅日記」の影響をうけてなされたものとみてよいであろう。

享徳四 代々

開山已来

源空御入滅 願徳 延暦二 二百四十四年

親鸞御入滅 龜山 弘長二 百九十四年

如信御往生 後伏見 正安二 百五十六年

覚如御往生 親忠 八十二才 百十六年

從覺御往生 延文五 九十六年 六十六才

善如御往生 康徳二 六十六年 五十七才

綽如御往生 明德四 六十二年 七十四才

巧如御往生 永享十二 六十六年 六十五才

存如御往生 康正三 六十二年 六十一才

結語

以上、顕智筆の『見聞』に載せる「御入滅之日記事」(史料A)、同じく顕智筆の『聞書』にみえる「御入滅日記事」(史料B)をめぐりほしいままな考察をめぐらしてきたが、これを要するにこの「御入滅日記事」は、親鸞直弟の顕智が見聞したところを書き留めている点が貴重で、かかる形式の「御入滅日記事」はことによると、すでに師の親鸞においてなされていた可能性も考えられる。顕智など親鸞直門侶がまだ多く活躍していた極初期真宗の門徒道場では、「御入滅日記事」に登場する印度・中国・日本の三朝浄土大師たちの命日を頻繁につとめては、念仏勸進を行ない志の銭を寄せていた親鸞門侶たちの姿が浮かび上ってくるし、やがてその祖師たちを視覚的にとらえんとして描かれたのが道場の光明本尊であり、肖像彫画像であり、絵巻、絵伝、絵詞だったのでないか。また道場では当然ながら勤行儀式も定められ、講式や讃嘆文も必要視されたにちがいない、覚如の『報恩講私記』、存覚の『嘆徳文』『謝徳講式』や『聖徳太子講式』『太子讃嘆表白』などは、かくして生まれたものとみてよからう。

意外におもわれたのは、本願寺の蓮如もこの「御入滅日記」を写している事実である。専修寺秘蔵のこれを蓮如が書写しえた背景には、蓮如と専修寺の真恵とが「高田本願寺両家ノ門徒ヲ互ニ不可取」と堅約していたことがあるからだ、蓮如書写の「御入滅日記」には、新たに顕智、慶円、信性の三人が加わっていて注目される。慶円は三河野寺本證寺、信性はその門流で越前和田本覚寺のそれぞれ開基であることは、祥月命日よりみて疑い

なく、共に彼らは高田門徒であった。蓮如が「御入滅日記」を写してのち、寛正年間から元来高田門徒に属していた三河の三箇寺（上宮寺・勝鬘寺・本證寺）が、蓮如の教化により本願寺門徒化していくことが契機となり、真恵と蓮如との仲違いは決定的となるが、蓮如の「御入滅日記」はちょうどそうした現象が顕在化する寸前の微妙な時期に写されているのではないかとおもわれる。したがってうがちすぎた見方かもしれないが、真恵はこの「御入滅日記」を写させることによって、三河や越前における高田門徒の本願寺門徒化を牽制し、逆に蓮如は本證寺や本覺寺を本願寺門徒に取り込もうと意欲を燃したようにもみえてくるのである。その後この「御入滅日記」は享徳四年（一四五五）の蓮如筆福井超勝寺藏「開山已来代々」や永正七年（一五二〇）の真智筆福井法雲寺藏「浄土真宗三國伝来系図」、はたまた蓮如筆石川専光寺藏などの「本願寺歴代上人銘」や真恵筆名号の左右へ専修寺歴代上人銘を書き加えること等にも影響を及ぼしていると考えられ、¹⁴「御入滅日記事」は初期中期真宗における重要な史料の一つとして、今後もっと注目しなければならないことなどを記述してみたが、おそらく見当違いの誤謬も多々犯しているとおもわれるので、諸彦の忌憚なき叱正を希うものである。末筆ながら本稿を草するにあたっては、『高田古典』なくしてはありえなかつたし、また平松令三先生には西本願寺藏蓮如筆の「御入滅日記」をご教示いただくなど多大の学恩をこうむつた。特記して感謝の意を表し擲筆するものである。

註

- (1) 赤松俊秀『鎌倉仏教の研究』一九五七年八月 平楽寺書店 一三三頁。
大橋俊雄『一遍』—人物叢書一八三—一九八三年二月 吉川弘文館 二二二頁。
赤松氏はこれら五巻の聖教を一遍の著述と推定されたが、大橋氏は「二尊二経を強調し、一聞生信一念帰依を説いているところからすれば、深草顯意の撰述書と見た方がよさそうである。」とされる。
- (2) 山上正尊『南国の原始真宗』一九三六年一月 其弘堂書店 五二頁。
日下無倫「真宗高田門徒に於ける秘密相伝について」『大谷学報』一六一—四 一九三五年一月。
親鸞筆による釈迦の年譜は専修寺蔵『見聞集』(『親鸞聖人真蹟集成』第九巻一四〇頁)。曇鸞の往生年と没跡については専修寺蔵『浄土高僧和讃』(同第三巻一七六—七頁)、西本願寺蔵『浄土論註』(同第七巻四〇七頁)、専修寺蔵『尊号真像銘文』(同第四巻一八三—一九〇頁)。道緯は西本願寺蔵『釈道緯』(京都国立博物館『西本願寺展』六三頁)。聖徳太子は石川専光寺蔵永享九年(一四三七) 存如書写『高僧和讃』(龍谷大学善本叢書二二『三帖和讃』四九六頁)、西本願寺蔵『上宮太子御記』(『大系真宗史料』特別巻絵巻と絵詞一七六頁)など。法然房源空は東本願寺蔵『教行信証』『集成』第二巻六七三頁)、専修寺蔵『浄土高僧和讃』(同三巻二六九頁)、同蔵『西方指南抄』所収「法然聖人臨終行儀」(同第五巻三二—四頁以下)、「源空聖人私日記」(同四〇九頁以下)など。聖覚は専修寺蔵ひらかな本『唯信抄』(同第八巻三二八頁)等々に入滅年月日などの記録が残されている。
- (4) 妙源寺蔵の『尊号真像銘』は一九三七年一月法蔵館より複製本が出されており、『真宗聖教全書』五拾遺部下(九六—八頁)に活字化されている。同寺の光明本尊は『真宗重宝聚英』第二巻(四—三頁)に所収。
- (5) 『存覚上人袖日記』(『龍谷大学善本叢書』三一—二七八—二八二頁)。なお親鸞入滅日時については一部切り取られている箇所もあるが、西本願寺、専修寺蔵『教行信証』にも記載される。
- (6) 安城市歴史博物館『蓮如上人—復興の生涯—』一九九五年四月 安城市歴史博物館 三四頁。
- (7) 山田文昭『真宗史之研究』一九三四年一〇月 破塵閣書房 一二二頁。
- (8) 北西 弘『反古裏考証』一九八五年七月 真宗大谷派宗務所出版部 一八一頁。
宮崎 清『真宗反故裏書之研究』一九八七年三月 永田文昌堂 三四五頁。
- (9) 『三河念仏相承日記』は岡崎市上宮寺蔵のものが有名であったが、昭和六十三年(一九八八)八月の同寺火災で焼失した。

(10) しかし平成十八年八月十八日同市東泉寺より上宮寺の原本に当る室町中期の古写本が発見された。
註5の二一九頁。

(11) 天野信治「野寺本證寺慶円上人像の胎内銘文について」『安城市歴史博物館研究紀要』九 二〇〇二年三月。

(12) 浅香年木「小松本覚寺史」一九八二年一月 真宗大谷派本覚寺。

(13) 安城市歴史博物館『聖徳太子像の造形―真宗の聖徳太子像―』一九九三年四月

安城市教育委員会『木造聖徳太子孝養像修理報告書』一九九四年三月。

天野信治「野寺本證寺の孝養太子像について―越前和田本覚寺蔵との類似点をめぐって―」『安城市歴史博物館紀要』二

一九九四年三月。

(14) 蓮如筆の福井(西)超勝寺蔵「開山已来代々」(本願寺歴代銘)と同筆石川専光寺蔵「本願寺上人歴代銘」は共に註6の二八頁と三九頁に掲載されている。また福井法雲寺蔵の「浄土真宗三国伝来系図」は、一九七六年一〇月法雲寺常盤井家史料保存会発行『法雲寺』一〇頁にみられるほか複製品も出ている。ちなみに右の「系図」には顕智筆「御入滅日記事」に記される二十六人中、羅什・惠慈・馬鳴・弘法の四人を除く二十二人が登場する。

史料④ 顕智筆「見聞」所収「御入滅之日記事」 三重専修寺蔵

一 御入滅之日記事

釋迦如来 穆王 壬申 二月十五日

龍樹菩薩 十月十八日

天親菩薩 三月三日
御年八十

菩提流支 十一月四日
御年百五十六

曇鸞法師 七月七日
御年六十七

羅什三蔵 八月廿日

道綽禪師 四月廿七日
御年八十四

善導和尚 三月十四日
或廿七日

懷感禪師 八月三十日

小康 十月三日

聖徳太子 二月廿二日
御年四十九

惠慈禪師 六月廿二日
太子二年オトリテ

空也聖人 九月十一日
御年七十

源信和尚 六月十日

永觀律師 十一月二日
御年七十九

源空上人 正月廿五日
御年八十

信空法師 九月九日

隆寛律師 六月十六日
御年八十七

聖覺法印 三月五日
御年六十九

親鸞法師 十一月廿八日
御年九十

真佛法師 三月五日
御年五十

一馬鳴菩薩 三月三日

傳教大師 六月十四日
御年五十六

弘法大師 三月廿二日

慈覺大師 正月十四日
御年七十一

行基菩薩 二月二日
御年八十

史料⑧ 顯智筆『聞書』所収「御入滅日記事」 三重専修寺蔵

一 御入滅日記事

釋迦如来 穆王壬申二月十五日

龍樹菩薩 十月十八日

天親菩薩 三月三日
御年八十

菩提流支 十一月四日
御年百五十六

羅什三蔵 八月廿日

曇鸞法師 七月七日
御年六十七

道綽禪師 四月廿七日
御年八十四

真宗史料としての「御入滅日記事」

善導和尚
三月十四日
或廿七日

懷感禪師
八月三十日

小康
十月三日

聖德太子
二月廿二日
御年四十九

惠慈禪師
六月廿二日
太子二年未ト
リテ

空也聖人
御年七十一日

源信和尚
六月十日

永觀律師
十一月二日
御年七十九

源空上人
正月廿五日
御年八十

信空法師
九月九日

隆寬律師
六月十六日
御年八十

聖覺法印
三月五日
御年六十九

親鸞上人
十一月廿八日
御年九十

真佛法師
三月八日
御年五十

一馬鳴菩薩
三月三日

傳教大師
六月十四日
御年五十六

弘法大師
三月廿一日

慈覺大師
正月十四日
御年七十四

行基菩薩
二月二日
御年八十

史料◎ 蓮如筆『諸要文集』所収「御入滅日記」 京都西本願寺藏

御入滅日記

釋迦如来
二月十五日
御年

龍樹菩薩
十月十八日

天親菩薩
三月三日
御年

馬鳴菩薩	三月三日	
菩提流支	十一月四日	百五十六
羅什三藏	八月廿日	
曇鸞和尚	七月七日	六十七
道綽禪師	四月廿七日	八十四
善導和尚	三月十四日	或廿七日
懷威禪師	八月十三日	
小康法師	十月三日	
聖德太子	二月廿二日	四十九
慈惠法師	六月廿二日	太子三年オトリテ
傳教大師	六月四日	
弘法大師	三月廿一日	
慈覺大師	正月十四日	七十一
空也上人	九月十一日	七
行基菩薩	二月二日	八
源信和尚	六月十日	

永観律師	十一月二日	七十九
源空上人	正月廿五日	八十
信空法師	九月九日	
隆寛律師	六月十六日	八十
親鸞上人	十一月廿八日	九十
真佛法師	三月八日	五十
顕智法師	七月四日	八十五
慶円法師	正月十三日	七十
信性法師	九月廿二日	七十五

〔付記〕小論脱稿後、独立行政法人東京文化財研究所美術部広領域研究室長津田徹英氏の『中世真宗の美術』（『日本美術』四八八 至文堂 二〇〇七年一月）が、神奈川県立金沢文庫学芸課長西岡芳文氏の特別寄稿「初期真宗へのタイム・トリップ」を添えて発刊された。この書は従来等閑視されがちであった日本仏教美術史上における真宗美術の位置付けを鋭い識見と豊富貴重な図版とから明確にした画期的な力作で、拙稿とも関連する初期真宗道場安置物の示唆に富む記述も多々みられる内容となっている。大変参考になる重要な図書であるから、ぜひ一読されるよう広く江湖におすすめるものである。